書けと言われた（私への覚書）私が夜毎佇んでいる。これは挿入である。

　のし、のし。まさに暗いところから急に明るいところへ出たときだった。

　人口密度が高すぎると言った。そういうもんだと答えた。溜息まじりでもなさそうだった。そういうもんでしかないのだった。

　昨日とか今日ということがわからなくなっていた。何年も前が何年も続いていた。

　左脚から先に前に出すべきか、それとも、と考えあぐねているふうな人がいて、その人に声をかけたそうにしている人の半開きになった口からは小さな声みたいなものが漏れていたかもしれない、それは雑踏の中では耳を澄ましても聞こえそうになかった。

　地上に続く階段の途中の手摺を握り締めたくなくて手のひらを軽くあてがい、俯き、左脚のかかとを心持ち上げて、下げた。右脚を上げて下げた。

　繰り返していたとは言わない。ナンセンスだ。繰り返すまい。繰り返していたのだ、何度も。そんなことは言わない。誰にも言えるはずがない。そんなこと。

　男は見かねた。それは何に近かったか。嗚咽に近かった、とは言えない。男が物理的にその男に近かったということは見ればすぐにわかることだった。ただ彼らが実際にはどれほどまで近く、遠いのかはその場に居合わせた人誰もがわかったようなことしか言えなかったのではないか。逆説めいたことを言いたいわけではない。

　見えない地上から光が射していた。地上までもう一歩というところで男は躊躇っている、ようにも見えたかもしれないがしかし。

　奇妙にも男の服が乱れていた。チェックのシャツを着ていた。色はどうでもいい。私にはそれを何色と表現してよいかわからない。二種類の色がおそらくは、交差していた。生地は木綿か。家に帰ってから妻に聞いてみるべきことかもしれないと思った。シャツは木綿であってますかと。妻は答えるだろう。あってますと。あるいは馬鹿にしたように笑うかもしれない。あってないのかもしれない。ときには当たっているというかもしれない。そうしたらどういうときには当たっているのかむしろ外れているといえるのか妻にもう一度聞いてみたくなるなるだろう。私はそれをぐっとこらえるかもしれない。何事も聞きすぎてはいけない。妻がまたそういうかもしれないと私は思うだろうから。

　大きく間違ってはいない。しかし男は少し乱れていた。私の目にはそう映ったのだ。襟が半分だけ立っていたとか、全部立っていたとか、きちんと曲がっていなかったとかそういうことではないのだ。ボタンがずれていたとか外れていたとか緩んでいたとか逆にきっちりしすぎていたとかそういうことであったのだろうか。私の記憶違いであるかもしれないということは否めない。それでも記憶違いであるかもしれない私の記憶の一部にも男の乱れている部分が残っていると信じているらしい私のその印象が確からしいということまでは仮に正しいということにしてくれるのなら、きっと大きく間違ってはいないと思ったのはボタンとか襟とかではなかったのだ。

　だいいち私の位置からでは彼のボタンのことまではわからなかった。襟については身体の右の側面についてなら何事か言えるかもしれない。しかしその場合は誰しも言えることを言うはめになるだろう。その襟の折れ具合から記憶を頼りに葦の話でもすることは許されるかもしれない。ただあいにくそれは私の関心事ではない。

　地上から来た人の話では今日は桜がきれいだという。

　スプリングコートを着た女の人がヒールのかこつ音を響かせながら降りてきたとき自分だけが知っていることを女にも知らせようとして脚のかかとを上げ下げしている男のまわりでうろうろしていた男がしたり顔で彼女を見上げたとき、そう、そういうときが何度もあった。男の関心も女の無関心もお互いはお互いを気にも留めなかった。

　ポケットにはいつも、なぜか、私のしらぬうちにおそらくは、過去が詰め込まれている。私はコートの中の銀紙に包まれた小さく、柔らかいものを人知れず弄んでいた。銀紙からはみ出た粘着性の物をその粘着性が失われるまで親指と人差し指の腹で捏ね回してはポケットから出した手から地下道の側溝、私が立っているのはちょうどそのような場所だったのだが、そこへとちりばめた。

　頭の中がやけに騒がしい。道行く人の立てる振動が地面に接続した脚から、あるいは乱れた空気の渦に触れた鼓膜から伝わり身体中に揺さぶりをかけているに違いない。こんなときは妻の顔を思い浮かべることさえ困難を極める。眼の前の人だかりの先に階段を上りかけ、固まった男と男の不動を自分だけが見抜いたことにはしゃぎ立てる男がいたのだ。

　光には誰も関心を払わない。ただ差していた。ありがたくもなんともないのだ、光など。そう彼らにとっては。

　今日は桜がきれいだという。今朝妻から聞いた話かもしれない。私はそれを聞こえなかったことにしていつも通り靴べらを布製の靴と踵の間に差し込んでいたことだろう。

　嘘ではない、口から出まかせだ。誰かが言った。そう嘘をつくつもりはなかった。私は妻がきれいだと思った。きれいだと言った。妻は嘘だと言った。あれは今の私に向かって言ったものだった。今になりわかった。私は未来の中を十分生きることはできなかった。ただでさえ頭の中が悲鳴を上げていたのだから。言い訳めいた言葉を打ち消す彼女の眼差しが蘇る、今こそそれは私に向けられている。

　彼の身体が重心を移すまでもう一歩のところだった。もう一歩のところで彼はいつも躊躇いがちになった。前に進む意志がぜひとも必要だった。彼に足りないのはそれだけのように思われた。誰もが彼を非難するだろう。もちろん私も例外ではない。

　小躍りしながら男はひと言も物を言わなかった。私は書くためには彼の言動にじゅうぶん注意深くある必要があると感じていた。それでも私の注意深さをよそに彼は記述すべきものをまるで私の記憶に残さなかった。こう書いてしまえば彼についてはこれ以上仔細に物語ることは私には許されないように思われるのかもしれない。記憶というものは不意に蘇るものであるということをどうかお忘れにならないでいただきたい。

　確かに妻は今日は桜がきれいだと言ったと思う。しかしどこの桜を見てのことだろう。玄関を出てすぐ向かいの中年の女性と目が合った。一瞬だけ。桜は私の家にも彼女の家にも根付いていなかった。どこにも桜など咲いていない。季節は秋だったのかもしれない。

　眼を覚ませば何もかも思い出すかもしれなかった。何もかも忘れることだってあっただろう。忘れたことさえ普通忘れてしまうのだから、私にはいずれ何の確証も得られないのだが。妻の言葉を信用するしかなかった。良くないことに妻は疑わしいことばかりを口にした。訝しく思うのはあなたの頭がおかしい証拠だと言われたらしぶしぶ引きさがるしかなかった。

　妻の顔が思い出せなかった。外に出るといつも忘れる。家にいるときは覚えている気がする。いや、妻がいるときはそれが妻であることは私にはわかっていたはずだという気がする。妻が今そばにいればそれが証明できるのだが。残念なことではある。妻のエプロンの柄、生地、デザインだけはいつも明示的であった。色彩については聞かないでほしい。明示的であることについても私には明解に記述することが不可能なことに思われる。だいいち、エプロンの柄、生地、デザインが明示的であることそれ自体が本来言語を絶した体験であるのだから。まったく不可解なことである。私は妻のエプロンの柄、生地、デザインについてまったく思い出すことができない。

　私には書くことが苦痛でしょうがない。できることなら何も書きたくない。書きたいことなど何もないのだから。

　脂まみれの男が立っていた。ただそれだけのことなのだ。いくら脂にまみれようが、男は男だ。立っていた。私が問いかければ何か答えたことだろう。私は何かその男に問いかけただろうか。書き留められたメモを見ると脂まみれの男と書かれていた。ただそれだけだった。だから立ってはいなかったかもしれない。私はメモの言葉を繋ぎ合せてそれにいちいち解釈をほどこさなければならない。生きるためである。

　誤解のないように言っておく。私の記憶力は抜群にいい。何もかも覚えている。しかし覚え過ぎているせいで、何もかもを見失ってしまうのだ。これは比喩にすぎない。記憶の人、というわけではない。私が比喩を解するかどうか甚だ怪しいものだと思われたかもしれない。私にとっての比喩というものはＡであるところにＢを持ってくるだとか、ＡをＡの要素に置き換えるだとかそういった類のことではないだろう。あえて言えば、私には比喩でないものがない。大げさに言いたてることでもないのだが。もっとも謙虚な物言いをすればそういうことである。比喩しかないと言おうが比喩はないと言おうが同じこと。

　よっぽどのことでもない限り妻は私の言うことに同意しないだろう。緑の深い森の中を歩いていた、と私のメモに書かれている。緑の深い森で何をしていたかということについてはもう一枚のメモを見ればすぐにわかる。私たちはスキップしていた。

　メモとメモの空間的な近縁性と時間的なそれとの相関については何も確実なことが言えないということからして、私の解釈が多分にミスリーディングなものとなっている可能性は排除できず、むしろよっぽどのことでもないかぎり、つまり私の勘がひときわ冴えわたっている日でもない限りは、私の言葉は甚だ私自身にとっても信用ならないものでしかない。そもそも私の頭が冴えているのかどうか誰が正当な判断をくだしてくれるのだろうか。

　あなたの文章はまずいと言われた。さっき先生と妻から呼ばれる男が来て言った言葉を忘れないうちに書き留めておくことにする。

　文章はなるべく短く。そのほうが読みやすいから。男は襟の縁を右手で背中のほうから喉のほうへ親指と人差し指で挟みながら滑らせていた。私はベッドで寝ていた。男はベッドの脇に立って私を見下ろしていた。私は彼を見上げなかった。かろうじて男の首回りまで私の視界にかかっていた。

　一呼吸置きたいときは丸。点はそれよりも少なく呼吸させたいときに使う。呼吸させないと死んでしまうよ。男は笑った。妻はコップに液体の入ったお盆を持って入ってきてなんだかわからない男の笑いと交わった。

　強調させたいときや会話は括弧にいれる。いれなくてもいいけどね。あなたは入れたほうがいい。どうしてと聞くとあなたはとにかく誰が何を言っているのか把握しなければならないから。強調はあなたに価値判断をつける力を与える。

　現在に過去や未来を交錯させるといい。私には過去を自由自在に操ることはできないと言ったら男は苦笑した。それなら書くのをやめなさい。まあ先のことなら書けるでしょう。とにかく挟めばいいでしょう。意識の流れに忠実に。そのとき妻が男に耳打ちをした。男は、なるほど、仕方がないでしょう、それならなんでもいいからあなたはとにかく嘘を書かなければならない。いいですか。

　段落分けをしなさい。あなたには区切りをつけることが必要です。

　男は座らなかった。妻も横で立っていた。季節は春。桜は散ってしまった。窓の隙間からおそらく風がカーテンを揺らしていた、レースの。私はよそ見して話を聞いた。

　私は今嘘を書いている、男に言われた通り。

　階段の男は執拗に私の視界を右往左往していた。右目を閉じても左目を閉じても男がいた。二人。それ以上には増えなかったし、減らなかった。両目を閉じると暗くなった。耳を閉ざしたいときはどうすればいいのだろうか。音は耳をふさいでも消えなかった。眼を閉じて見えなくなるというのは大々的な嘘かもしれない。大いにあり得る。

　話がやすきに流れる。空が晴れている。部屋の窓は広く取られていた。出窓が東側と南側に一つずつ。南の窓からは一面に田んぼが広がる。五月上旬、トラクターの音が枕元に届く。私は多分いつものように寝ていた。妻は次第に被害的になっていくような気がした。

　私は書くものを滅多に見直さない。文章を読むのが億劫なわけではなくて、思い出したくない日が多いからかもしれない。しかし滅多に読み返さないというのは私の直観でしかない。そもそも私は以前の私がちゃんと物を読む人だったのかどうかさえも確証がない。昨日の私は自分の書き物を熱心に読み耽る人であったかもしれない。私の直観ではそれはありえないのだが。直観という形で記憶が私の外から回帰してくるのかもしれない。ただの思い込みかもしれないのだが。現に妻は私の勘についてはよく否定する、らしい。今日も私が枕元の台の上にはいつも一輪挿しが置かれていたのではないかと言うと、あなたはいつもそんなことを言うとうんざりした顔をこちらに向けた。そんなことは断じてない。

　どうも私は日付に疎いらしく、書かれた順序も正しく配置されていないようなのでもし読まれる方がいるようなら気をつけていただきたいと思う。順序が適切でないと感じたのは今日の妻の顔色をうかがっての憶測である。妻はいつも煮え切らない。あべこべのことを言っている気がしている。

　妻に好きと書けと言われた。これはどういうことだろうか。

　夕方より雨が降った。蒸し暑い夜。蛙が鳴いている。脇の下のにおいを何度も嗅いだ。

　私の書いたと言われるものが読まれるとしたらそのときそれは妻によってかあの男かあるいは他の誰かによって検閲・校正済みのものであって私が実際に書いたものとは別のものになっているに違いない。そうでなければとても読めたものにはなっていないはずだ。

　私の文法はめちゃくちゃだからと妻が言う。書き換えられたところを実際に見たわけではない。ベッドに取り付けられた簡易机から私の原稿を取り上げると妻は書いてあることだけを確認してどこかへ持っていってしまう。書いてあることだけを確認していると私が思うのはなぜだろうか。私は妻にここを正せと言われた記憶がない。

　今日、妻が口の中に突っ込んだ歯ブラシの毛先が痛くて仕方なくて、歯を思い切り食いしばった。

　あの人は真面目よと聞えよがしに妻が言う声が聞こえた。

　今日は酔っている。なぜって、妻が飲ませたから。私の記憶はいつも以上に定かではない。そんなときに妻は書けという。

　妻の唇を吸おうとすると、妻は私の口に手を押し当てた。つい先ほどのことだから記憶も鮮明だ。私の唇の触れた手を妻はズボンでさっと拭った。

　妻は聞えよがしにこう言うのだ。隣の部屋から。あの人は真面目よと。疑り深そうな声がそれに応じる。

　Le plus important est invisible.

　妻が言った。星の王子さまよ。あなた好きだったでしょ。

　私はそんなもの好きではないよ。

　ダリアの花言葉は移り気、華麗、優雅、威厳、不安定だと少女が教えてくれた。真夜中だった。私が恐ろしい気分で眼を覚ますと白い服が月明かりに照らされていた。窓辺のパイプ椅子は多分昨日妻が座ったときの位置のままだった。

　ダリアの花言葉は。少女が言った。私は物が言えるような状態ではなかった。だから少女が廊下へ出ていったときにあとを追った私も寝ている私とは別物だった。素足に夜の冷たさが伝わった、と書くと誰かが笑う声が聞こえる。

　いとも簡単に少女と私は歩いていた。扉のノブもまた冷たかったが。

　廊下は左手のほうに長くのびている。右手のほうはすぐに右に折れ曲がる突き当たりがあり、緩やかに傾斜していた。左手は水平だった。しばらく私はノブから手を離さなかった。ともすると手は滑りがちだった。私はいちいち態勢を立て直さなければならなかった。

　ひとりの私は少女と突き当たりの坂を暗がりの中へ歩いていた。もう一人はベッドで寝ていて花言葉を聞かされていた。

　私は目の前の部屋に妻が隠れているにちがいないと思った。ふだん妻がどこで寝ているかは知らない。この家には部屋がいささか多すぎるようだ。便所の位置だけがすぐにわかった。小便をするにも下駄に履きかえなければならないところを私は素足で歩いた。公衆便所のつくりで、白い縦に長い容器が三つ、横に長い容器が小部屋の中に三つある。においなどわかるわけもない。白い容器がぼんやり光っているだけだった。それを少女と見紛うはずもない。いくら私でもそれはなかっただろう。しかしそれにしても少女の背丈は容器のそれと寸分たがわぬようでもあったのだから私もどこまで見下げ果てたものかわからない。

　小部屋の壁に耳を押し当てた。耳というのは何かに押し付けるためにあるのだろうか。壁に吸いつけられた。私の耳が壁に吸いついていた。逆の耳を押し当てるために身体の向きを変えると、小部屋の扉の前に妻が立っていた。早くベッドに戻ること、もうすぐ夜が明けることを告げられた。便所の穴に足を突っ込まないように跨ぐと妻の顔がすぐ目の前に迫った。妻は微動だにしなかった。私はそのとき妻が少女を隠しているのではないかと思った。

　少女は私にダリアの花言葉を教えてくれた。もう忘れてしまったが。扉を開けると目の前に妻が立っていた。

　どこへ行くの。あんたは歩けないのよ。私への腹いせのつもりかもしれないけどね、そんなことではだめ。昨日窓を開けたときに言ったでしょう。庭には大きな木がある。花も葉っぱもつけてない木のことで切った切らないのと騒いでいた隣人を思い出して私が言ったでしょ。物干しざおは一度も拭いたことなどない。洗濯物は汚れるいっぽう。あなたがいいなら私はそれでもいい。縁側は日のあたっているうちはいいけど、暗くなったら近寄ってはだめ。音を立ててはいけない。あんたが嘘をついていると思っていることはちゃんと知ってる。私たち二人だけの家ではないのよ。昔っから。あなたは何を言っても言うことを聞かない。昨日言いつけたことさえまともにできない。自分のことくらい書けるでしょう。何も面白いことを言えとは言っていない。あんたはそれさえ忘れてる。ただ字数を埋めればまだしもと言っているそばから気取ったことを書きたがるんだから。あんたは小説家ではないの。あんたの文章で物が食えるだなんてつゆほども思っていないんだから。だからといってただあんたのためというわけではない。私がそんな無益なことするはずないでしょう。あんたはどうせすぐ忘れるから言ってるんだよ。あんたのことなんて誰も相手にしやしないよ。夢ばっかり見てるんだから。私が手を引いて歩いてあげようか。それで満足して寝てくれるというのならお安いご用。明日になれば家の中を歩き回ったあんたはどうせどこかへ行ってしまうというのにね。お気楽なものだよ。

　ダリアの花言葉は移り気、華麗、優雅、威厳、不安定だ。妻が教えてくれたことではない。今日妻が言った。花瓶なんて置いたことはないと。ふと気が付くと妻は林檎と包丁を私の胸元に置いている。私の簡易机の上の原稿をちらりと見やり、出ていく。今日は出ていく前に窓辺に立った。椅子に腰かけて、レースのカーテンを揺れるにまかせて景色を眺めている様子だった。それから舌打ちをしてまた立ちあがった。

　私はたまに昔のことを思い出す。それがいつのことなのかはまったくわからないまま。まったくでたらめな順序でとりとめもなく。昔のことですらないのかもしれない。私はいつどこで起こったのかすらわからないことをつい最近起きたこととして当たり前に物語ることがよくあるのかもしれない。私は昨日起きたに違いないと確信している事柄を今頭の中にひとつ抱えていて、それを書き留めるべきかどうか戸惑っている。私が読まれることを前提にしているかぎりはそれがたとえひとりの人間でしかなかったとしても配慮に欠くことになりはしないか不安でしかたがない。本当に配慮すべきだろう事柄についてはいつもとてもだらしないに違いない私が。妻は十字架を背負っていた。

　私の文章が修正無しに人目に晒されることはまずないといってよいと思う。妻は私の書いたものについてまったく評価しない。評価しないというのは悪いということではなくていいのか悪いのかまったくわからないということだ。妻はいつもまったくの無表情でまったくもって言葉を発さない。私は手渡した瞬間、あるいは取り上げられた瞬間に、そこに何が書かれていたかすっかり思い出せなくなってしまう。妻の表情を見てどうにか思い出そうとしても取り付く島がない。今日の妻は目元が綺麗だった。あるいはいつものことかとも思われる。昼下がりに庭の大樹に雀の群れがやってきてひと騒ぎして帰って行った。

　私が読まれているつもりでいるその文章が私の書いたものではないかもしれなくても、私は書かなければならない。私が肯定的に好意的に書いている事柄さえも日の目を見るに及んではたっぷりの悪意を持ってしか提示されていないのかもしれない。いったい私は何を書けば私の書いたことをできるだけ原形をとどめて伝えることができるのだろうか。

　私は家庭教師からしっかり教育を受けている。教師は煙草を吸って吐いて、窓の外にその手を差し出した。空いている左手で髪の毛を苛立たしげにかきむしって何か呟いた。私は萎縮してペンを握った手を離さないでいる。小便が我慢しきれず掛け布団の下で尿瓶にこっそり注ぎ込んだのがばれたのだろうか。ほとんど尿が途切れると同時にその人が私のほうを見た。私の言うとおりにしたら一等賞がとれるがどうするかねと尋ねた。是非もないことだった。

　私はひと気のない真昼の広野で眩暈を覚えた。足腰が弱いらしい私は車椅子に乗って呆然としている。よく見れば、草木が生い茂っていたようだ。私の目に何か映るたびにそれまで映し出されていた何かが記憶から追いやられていった。緑というものがほとんど私にはわからない。砂利道は当然のことながら私の歩みを妨げた。土埃が煙たくなった。私に手を差し伸べてくれるものは誰もいない。至近距離になると人影がかろうじて見えた。すぐさま人影は私の狭い視界の外へと消えていく。行儀よくサドルに乗せられた二本の脚が私の視界の八割方を占めていた。小さな子供も当然のことながら私よりしっかりと地に足をつけている。気が付けば顔じゅう汗まみれになっていた。脇の下のにおいをさりげなく鼻を近づけて嗅いでみると、それにはまだ及ばないようだった。立ち止まれば風が涼しい。夕涼みというにはまだ日がずいぶんと高い。おそらく長いこと進んだつもりでいても牛歩と子供に指さして笑われたところのほうが正しいのだろう。ぎゅうほ、ぎゅうほとなんのことだかさっぱりわからなかった。誰が教えたのだろう。

　どういうわけか身体がけだるい。鉛みたいかと妻が医者のようなことをとても冷たい目をして言った。私が何かしでかしたのだろうか。私は彼女が妻であることが名乗らずともわかっていた。本来妻とはそういうものなのだ。夫婦の仲は何事も引き裂くことができない。妻よ、と私が言った。妻は表情ひとつ変えずに突っ立つばかりだった。寝巻を脱がして私の身体を濡れタオルで拭いた。乳首が引きちぎれるかと思った。悪意がこもっているなどとはつゆほども思わなかったが。彼女は等し並同じ力で私の身体を拭いていった。私の皮膚のデリケートな部分を知ってか知らずか彼女は意に介さないようだった。仕事が終わると彼女は一服だけ吸い込んだ煙草を私の口の中に突っ込んで濡れタオルを入れたバケツ片手に後ろ手で部屋の中から消えた。妻がいなくなるとだるさが再び身内に込み上げてきた。天井の二本の縦に細長い蛍光灯が消えかけていた。病室のようだと思った。空が薄暗く滲んでいた。何色であるか残念ながら私には言えない。皆がそれを何色と呼ぶのであるか知らないわけではないのだが。幼いころの訓練の成果かもしれないものが私を夜毎苦しめる。

　身体が冷えてしょうがない。気づくと少女が私の手首をつかんでいる。私の視力に問題があるのか夜目には彼女の顔はのっぺらぼうに見える。口元だけが妙に明るい。尿瓶で催しているときにも彼女は私の右手を離してくれなかった。ここが私の自宅でなければ少女が咎められることはなかっただろう。私は少女につかまれたまま立ちあがり、廊下の階段を下りた。長い階段は暗かった。後ろを振り返るとやはり少女の顔はなかった。具合の悪いことに少女の服は暗闇の中に溶け込んでいて、四肢だけが僅かに光っていた。足元に気をつけろと言うと少女の確かな靴音が響いた。

　真っ暗であるから何も見えなかった。私は少女につかまれていないほうの手を前方に差し出して障害物を探りながら歩いていた。奇妙なことに私の足音が聞こえなかった。歩いているうちに歯が痛み出した。奥歯がぐらついているらしい。舌で触れると簡単に抜けてしまいそうなぐらい地盤が緩んでいるなと思った。歯医者を呼ぶ必要があるだろうか。今こうして書きつけているのは妻に見せるためでもある。この文章はいつもやっているように妻に削除してもらえばいい。歯医者を呼んでほしい。少女は私の様子を察してか、父親に頼んでくれることを提案した。私はよろしく頼むと言った。もちろんさきほど妻に伝言を残したのは少女を信用していなかったからというわけではない。私たちが家を出た頃、外には少女の父親らしい人が立っていた。口元にたっぷりと髭をたくわえている。どうしたのだろうという怪訝な顔でどうもご迷惑をおかけしましたと男が言った。私はそのとき妻が私の背後に立っていることに気づかなかった。男の視線は私の姿を捉えていなかった。妻は私を家の中に押し込んだ。私は前後不覚でしばらく暗闇に立ちつくしていた。両手が自由になっていることに気づくと私は両手を前方に差し出し左右に振りながら歩き始めた。

　子供たちの声が聞こえる。深い霧がかかっている。私たちは目隠しされて男の声を頼りに右や左へ脚を出していた。突き当たりを右という指示は私たちが突き当たりの壁に頭をぶつけることを余儀なくさせるように思われた。賢いものは手をちゃんと前に差し出していればこそ無傷であったことを後から知った。私はひとり過酷な指示によく耐えたと思っていた。部屋に辿り着いたときに課題が与えられるのはこれからであることを初めて理解した。私たちは窓のない部屋で木でできた古びた机に座らされている。男は私たち二人に大きな声で何かを言った。男は襟を正し、教壇の上に腰をおろした。私は男の言うことを聞き逃さないようにしてペンをポケットから取り出してペン先を左手の甲にあてがった。男は何も言わず煙草をふかした。子供たちが私たちの股の間からひょっこり顔を覗かせて私たちを見上げていた。私のところは瞳の綺麗な少年だった。彼は私にチェルシーという名前の猫を飼っていることを教えてくれた。チェルシーは木登りが上手だった。日が暮れる前には必ず戻ってきて母が洗濯物を取り寄せるのを縁側で寝そべって眺めていた。チェルシーと呼ぶとうるさそうな目を黒眼だけ向けた。ねこじゃらしには無関心だった。私は逐一手の甲に書き留めていった。男はたばこをふかしていた。視線の先には壁があった。煙が天井にぶつかり広がった。少年は話すのをやめなかった。手の甲では足らず私は手をひっくり返して少年の言葉を無心に綴って行った。興奮すると少年は私の内腿にあてがった手に力がこもった。少年の熱を私が少しずつ奪っていた。

　心許なそうな少年の眼差しがいつの日とも知れず思い返される。気遣わしげな大人たちの非道を恐れているのかもしれなかった。私の股が閉じていた。煙草の煙のにおいを私は忘れるほど吸った。男は教卓の側面に寄りかかって立っていた。俯いていた。眠っているのかもしれなかった。いつも通りの静けさだ。股を開けば床の上で少年がうずくまって寝ている。隣の人の股は開いていて、少年は寝ていた。数秒前の私と同じことを考えているのかもしれないと隣人の横顔を眼でなぞりながら思った。しかしいくらか経ってから私が思うところを先取りしているのかもわからなかった。黒板には昼下がりと書かれていた。

　おまえの体験したことかと聞かれたらそうだと自信を持ってこたえられるはずのことを躊躇いがちにそうかも知れぬと言うのが美徳なのだと今日ある人から教わった。男の顔をあまり見たことがなくてそれらしく描写できないことが残念である。声にもこれといった特徴がなかった。まったくつかみどころのない男だと思った。それだけに敬意を表するに値する男であったのかもしれない。妻が先生と呼んだ。妻が耳打ちをしているときキスをしているのかと思った。男は口をへの字にしてああと言った。

　ああ、もういいわかった。男は妻の唇を耳から離した。彼女は私の衣服を脱がせ身体を拭いた。さあ、そのあとはどうしたと男が尋ねた。妻は私の胸板を雑巾かタオルでごしごしこすっている。ちゃぶ台みたいな机が私の布団の上に覆いかぶさっていた。その上に一枚だけ書きかけの原稿用紙がある。私が書かれたものを読み上げると、男がそうだと言った。妻はズボンを脱がされた私の下肢を右脚の付け根からこすっていった。こんなに垢が出ると言った。垢はシーツの上に見事にこぼれた。私は何か思い出したつもりになって文章の続きを書いてみた。最後の行まで書ききり男に手渡すと喜びもせずに一枚は一枚と言って新しい紙を胸元から取り出して私の机の上に置いた。妻が右端にセロテープを貼った。紙は風に煽られて裏返って小刻みに揺れた。

　妻は私に呼ばれることが照れ臭かった。無愛想な振りをしていても私にはすぐにわかってしまう。妻が私の身体を拭うときの手つきから。悪し様に物を言うその口ぶりから。険しい眼つきから。たっぷり恨みをこめたつもりが、丹精込めた愛情というのはどうしても滲み出てしまうものである。どうしたことか私には妻の逡巡が理解できない。長い歳月が二人の思い出を忘れさせた。それでも妻のなびかれた髪と横顔を見ていれば自然と記憶が想いのたけとなり湧き上がることで、いつも私は勇気づけられる。妻よ、と言えば涙もあふれる。妻のほうは妻のほうでこらえきれず部屋を飛び出してしまう。

　桜の花びらを一枚少女が私のてのひらに乗せた。桜がきれいだよ。外を見た。桜などどこにもあるはずがないと思っていたのに不思議なものである。庭先に大きな桜の木が小さな淡い花弁をいくつもぶらさげていた。どうしたことかと私は思わず嘆息を漏らした。何か不吉なことがあるに違いない。てのひらの花びらはまだみずみずしかった。少女は私の掛け布団の上に腕を乗せて腕の上に頭を乗せた。ツインテールの頭が左右に揺れて、その振動と重みが布団を通して私の身体に伝わった。季節を尋ねたら春だという。物静かな午後の日射しが気疎くなった。誰かが鼻歌を歌っているのか、今日の空気と同様に緩み切った、抑揚のない音色があたりに漂っている。

　妻が私の口の中にペンチを突っ込んだのにはちゃんと理由があった。

　どうせあんたは自分の顔が見えないんだから。妻の言うことに私は異論はないものの、違和感を覚えないわけにはいかなかった。私の顔を見ることができるのは私以外のものだけであるはずだ。それは他の人の顔についてもまったく同じことであるはずなのに、妻の口ぶりではどうもそうではない。私が妻の顔を描いてあげようとすると妻はいい、知っているという。私は妻を引きとめることができず先ほどの印象をたよりに顔を鉛筆の線でつくった。まず右側にある眼を描いた。しかし私には意味が分からなくなった。原稿用紙の裏に描きかけた妻の顔の上に涙がこぼれた。私には描くことができなかった。輪郭線がいつまでも閉じない。妻は永遠に完成されない。私は妻を呼んだ。大声で呼べば来てくれると思った。案の定妻はやってきた。絵を見せると妻は鼻を鳴らした。窓辺の椅子を少し窓から離し脚を組んで座った。なんで桜が綺麗だなんて言うのよと妻が窓の外を見て呟いた。横顔が綺麗だった。いつも綺麗だと私はきっと思っていると思った。だから今日も妻は綺麗だったということに違いなかった。あんたは覚えてないでしょうけどねと妻は言った。庭先の枯枝に雀が止まっているらしく、複数の戯れる声が飛び交っていた。妻は組んだ脚の上に右肘を乗せ頬杖をついていた。

　一から考え直したいという青年に特有の欲求に彼もまた囚われていたのかもしれなかった。この一文を書き留めておくように男が言った。引用ですかと聞くと、作家の名前を言った。もちろん私の知らない作家の。彼はナルシストだけどいいやつだと言った。

　私は暗闇の中に立ちつくしていることが多い気がする。両手を差し出した。輪郭をなぞると人の形をしているものにもしもしと話しかけてもみても返事はない。接吻をしてみたらと少女が言ったのは私の下心を見抜いてのことだろうか。私に足音がないのが素足のせいだと気づいたのはこの日は特別床が冷えていたからだろう。普段の足先は特に鈍い。気づいたら血だらけになっていた、ということもたびたびあったのではないか。季節は春だった。確認のために少女に聞いた。季節は春だとあんたは言ったよ。少女の手をとると冷たかった。海に行きたいね。あんたは海を知らないの？ずっと向うまで見えるよ。どこまでも？どこまでかは知らない。あんたは海で泳いだことがないの？ひっくり返ると波の音が聞こえて、目を閉じているとそこに青空があるとわかるよ。ボートに乗って海藻の中に手を突っ込むの。表面はとてもざらついている。海藻の森の中に飛び込むと全身にざらついたひだひだが絡みついてくる。溺れそうになるとお父さんが迎えにきておんぶをして岸まで送ってくれる。ボートはどんどん遠くなる。海岸が近くなる。藻が身体から離れて透き通った海の中からお父さんの脚が現れる。砂をはじいてる。砂の上を這う魚と蟹が右や左へよける。私は半分海に浸かっていて、もう半分が遠くからの風を浴びている。太陽の光が背中を焼いている。父との身体の間で水が生温かくなっている。砂がこすれる。鳥が鳴いている。父の肩を舌の先でちょっと舐めてみると塩辛い。ランチは砂浜でシートを広げてみんなで食べる。母がサンドイッチを作ってくれる。犬は塩まみれになって水をたくさん飲んだ。

　部屋はいくつかある。壁の表面をてのひらで撫ぜながらもう片方の手を目の前に差し出して歩くと既視感があった。この暗闇を私は何度も見ているのだと思った。顔のない少女の足音が響く。廊下から振動が伝わる。光はどこからも漏れてくることがない。一つの扉のノブを回してみる。中から人の気配がする。次に金はないという男の声がした。もう一度男の声が言った。金はないぞ。私も金はない。私は男の声のするほうへ歩いた。少女もついてくる。靴音が響いた。なんだ、金はないぞと男が言った。私もない。少女の靴音が響いた。取り立てじゃないのか？私は金などないぞ。今晩は、でしょうか。突然おじゃまして驚かせたようです。いつの間にか先に歩いていたらしい少女が私の手を引っ張って声のほうへ案内してくれているみたいだった。ここに座ってと言われた場所に言われるままに腰を下ろした。取り立てではないのだなと男の声が少し緩んだ。布が擦れる音が聞こえた。男が身体を動かしているらしいことが尻の下のクッションの弾みで感じられた。いつになく静かな夜だと言ってみた。まったくあべこべだと呆れた声で男が答えた。いつもはもっと静かだよ。今が夜ならな。私はちょうど右手に触れた金属製のポールと思われるものを上下にさすっていた。それもそうだ。私はあんたのことを知っているようだ。妻から聞いたのだろうかと私は思った。妻から聞いたのだろうか？ああ、妻？妻ね。男は奇妙な笑い方をした。あんたの奥さんは何も言わんだろうさ。家賃はどうしてる？家賃のことじゃないさ。私の不徳の致すところというやつだろうね。いつになったら朝が来るのだろうね。もう朝かもしれない。あんたはあべこべのことを言うね。おちおち寝ていられないよ。またあいつらが来るかと思った。名前は？どこのどいつだ。あんたの言ってることが私にはわからん。ここにいるお嬢さんのお父様をご存じでないかね。お嬢さん？それはあんたの口出しすることじゃないだろうね。それがあんたには必要だとされているのか？何故私に？なんでもないことさ。あんたにはわからんだろうが。私はもう寝るよ。また布が擦れ合う音がした。大きく息を吐く音がしてから男はすっかり静かになってしまった。声を掛けるとまだ居たのかと言った。まだいるさ。どこへ行けばいいのだろう。まず寝ることだ。

　あんたはまだ悩んでいるのと少女が言った。何を悩んでいるの？私は右手でポールをさすっていた。少女の姿は見えない。もちろん、見えるものなどありはしない。手を目の前にかざしてみた。そのまま手は頭を突き抜けるかもしれない。彼女の苛立ちが靴音にあらわれていた。男はとにかく寝ることだと寝返りを打つ音を立てて言った。あんたは夢を見るの？私は夢など覚えていない。トイレに行きたいのか？焦ることではないよ。馬鹿にしちゃいけない。大事なことだ。水を運ぶ夢を見ていたようだと男が言う。私は水を運んでいた。彼の目はちゃんと見開かれているよ。少女が私の耳元で言った。ちゃんと聞こえているよ。あんたは妻と知り合いなのか？私にも妻と子供がいるさ。家もちゃんとある。私は我が家へ水を届けにいったんだ。すると男がいる。善良な男だった。私のことなど知りやしない。私も他人のふりをして給水機の交換に取り掛かった。家にあがるとかつての面影があった。犬がいた。私の知らない犬だ。私にとびつこうとする犬を男が制した。二匹いる。一匹は白くてもう一匹は茶色いんだ。毛むくじゃらで手入れの行き届いていないところが妻を思わせた。妻になついているのは茶色いほうだろうと察しがついた。男の抑制を振り払って私にとびついてきた。もっとも男は犬からしたらあまりに軟弱だった。初めから男には犬を止める気などなかったといえばなかった。だっていつだって男は片手間だったから。お水屋さんと言った。こちらはうかうか世間話など始める気はなかったから、男の気さくな微笑みかけにはこたえず淡々と水の説明をした。冷えるまでしばらく時間がかかりますからね。でも、今水を全部出してしまいましたよ？交換する前の給水機について言っているのかもしれないと思った。いつまでも話のわからない男だった。妻が帰ってきたらどうしようと思った。水の説明に男は食いついてきた。私には彼の意図がまったくわからなかった。もちろん質問の意味すらわからない。白い犬が吠え続けていた。子供はまだ学校だろうか。興味津々で質問を浴びせ続ける男の後ろに大きな窓があった。視界は目隠しのためか置かれた大きな岩で近景のみ遮られている。遠くまで田園が広がっていた。引かれた水がさざ波を立てている。白鷺がじっと佇み水中を窺っている。岩陰から帽子が現れていた。浮き沈みを繰り返し少しずつ玄関のほうへ近づいてくる。男の子にしては背が高いな。しかし私はそれが息子であることを疑わなかった。男の話は打ち切るしかなかった。尽きることのない男の関心に私は苛立っていた。少年の帽子が近づいていた。まったくだらしのない男だと思った。犬が鳴きやむことはなかった。妻は買い物か二階にいるのかもしれなかった。来客を好まない人だったから。

　少女が飛び跳ねていた。両足が地面につくたびに大きな音のために耳が塞がれた。少女の身体を探る手がいつまでも空を切った。しばらく前から私は右手のポールが僅かに回転することを知っていた。だから今では上下の運動だけでなく回転運動もが私の手持無沙汰を慰めてくれていた。左手は空を切っていた。不思議だと思いながら少女の身体が触れないことにどこか安堵していた。そのことはまったく不思議なことではない。私はだらしなく不思議がりはしない。男に言った。疑問を持てばいつでも喜ばれるものと思っているのだろうね。少なくともそういう教育をしてきた。間違っていたとは思わないよ。聞かれることに眼の色輝かせる大人が多すぎただけだ。寝息だろうか、溜息だろうか、男は大きく苦しそうに息を吐いていた。

　ポールがあるということはベッドが二段式になっているということだ。少女の身体を探った手がベッドの端の中央付近の空間をよぎろうとしたときにたまたまぶつかったものが二階へ続く階段に違いなかった。階段は地面にほぼ垂直に取り付けられていて、二段か三段だけ登ればもう二階に辿りつけた。まず少女が踏みつけてしまったものは輪郭をなぞれば人の形をしていた。その次に私が踏みつけてしまった。喋らなければ人かどうかもわからないものだった。苦労して脇によけてもまたすぐに中央に戻ってきてしまう。私たちはほとほと呆れ果ててしまい、はらいせのつもりか少女が益体もないことにぺんぺんそれを叩くなり、そのままその上に二人して腰掛けた。真下から男の声が聞こえた。なんだって、と私が聞き返すとあんたまだ居たのかと男が言うのがわかった。え、なんだって？私が何も言う前に私の返事を聞き逃したと思ったらしい男が上からでは伝わりにくいとさも言わんばかりの大きな声で尋ねてきた。私も同じくらいの大声を張り上げることを求められているのかもしれなかった。私は声を張り上げることには抵抗があるからもう一度下に下りて普通の声でしゃべったほうがよさそうだと思った。私が何も言わないでいると私の返事を聞き逃していると思っているらしい男は苛立ち混じりの大声で詫びの言葉を放ってくる。私は答える代わりにベッドの床をノックすることにした。そのたびに男は大声で答えた。悪いね！あんたの声が私には聞こえないんだ。耳はいいつもりだったが、年波には勝てんな！なあ、あんたいくつだい？男は明らかに苛立っていた。彼の誠意に私がじゅうぶんに応えていないと感じているのかもしれなかった。私はまた床をこんこん叩いた。そうか、悪いね！私にはあんたの返事が聞こえんかった。しかし私よりは若そうだ。男は快濶に笑っていた。私はまた叩いた。少女が私の肩に頭を寄り添わせていた。ええ、なんだって？男が声を張り上げた。私は三回ノックした。手の代わりに足でしてみるとベッドごと揺れた。なんだって！男が私の振動に負けないだけの声を出した。何も考えることがないなと思った。今はノックするそれだけが私のすべてだ。男が声を張り上げる、ノックする、それだけが私のすべてだ。男がすまんね！と言った。私は靴を履いてない足で地面を蹴飛ばした。昨日の私も同じことをしていたかもしれない。明日も同じことをするのかもしれない。少女が今日みたいに私を導いてくれるかもしれない。意識が続くことは途切れることと同じくらい不思議だ。ある人にとっては途切れることのほうこそ不思議であるだろうが。どちらも共に神秘といわれているだろうことくらいは私にでも了解できる。私には何かが欠けているし、同じ何かが充満しきってもいる。失われた何かは初めから今でも私たちから失われてなどいない。一度も失われたためしがなかった。途切れた何かが今でも続いている。続いているものは今でも途切れている。繋がったことなど一度もなかったのだ。繋がったふりをしているのでも、断ち切られたふりをしているのでもなく、一度もそのどちらもが起こったことがなかった。今でも。しかしいつでも起こっている。起こらなかったことなどかつてない。明日になれば少女は消えるだろう。同じく私も。

　呆然と私は立ちつくしている。いつでもそうだっただろう。きっとこれからもそうなのだ。眼の前に妻がいる。眼と鼻の先だ。私はこのとき彼女に支えられていなければ立ちつくすことさえできなかった。妻は私に唾を吐きかけることもできただろう。ちょっと舌をはじきさえすればよかった。私の脇の下に両手をあてがい、ともすれば前に傾いたり後ろに傾いたりする私の身体を揺り戻すのだった。その反動が実は私はとても怖かった。妻にはただ微笑んでいたが。妻は私が泣いていようが笑っていようが、お構いなしだった。必要とされる距離を歩いたところで私を放置して煙をふかす。私たちは湖畔にいた。木の周囲を取り囲むように据えられたドーナツ状の椅子に腰かけた。彼女は片手を腰にあてて湖の前に棒立ちになっていた。きらびやかな光の遮られた背中が暗かった。光の粒々が踊る湖面を風が駆け巡り皺をつくっていた。ここは妻に書き換えられるかもしれない。彼女ならもっと正確に表現できるに違いないから。私はパジャマだった。妻は上から下までひとつながりの面白い服を着ている。妻は振り返り、私の口に煙草を突っ込んでポケットから取り出した手袋をはめると、私をその手で立ち上がらせた。季節は春である。

　湖畔からは私の邸宅が見える。窓から顔を覗かせ手を振る少女。私が手を振ろうとすると、妻は私の挙げかけた手を荒っぽく引きもどした。妻は私と向かい合って前方に差し出された二本の私の手の先端を自分の指先に引っかけて私が前進する速度に合わせて後退してくれていた、あるいは彼女の後退する速度に合わせて私が前進していた。

　あんたもっと脚を上げないと。少女は笑顔に見えた。というのはまぶしくて私には彼女の顔がよくわからなかった。窓から身を乗り出していた。後ろの廊下を人が行ったり来たりしていた。妻は知らぬ間に煙草を口にくわえていた。公園の入り口にさしかかったところで急に私は疲労を覚え、立ち止まろうとすると指先をぐいぐい引っ張る妻に哀願してどうにか休ませてもらった。入口のところにあるくの字型の金属製の障害物の上に腰掛けるとにわかに汗が額から滲み出した。妻は口から指先で煙草を抜き取り車の往来を眺めていた。あんたいくつだっけ、と妻がおそらく私に尋ねた。あいかわらず視線は車道のほうへ向けられていた。私は妻のうなじを見ていた。妻はたまに意地の悪い質問をする。今日は何年だとか何日だとか何曜日だとか。あんたの名前は何だったとか。私は途方に暮れるばかりだ。そんなの知る由もないことなのだから。私があてずっぽうで答えると妻は笑う。違っていても、当たっていても。妻も正解を知らないらしいときは何も言わずにただ笑う。行こうかと妻が言った。私はもう少し休ませてほしいと言った。自宅の窓を見ると少女がまだこちらを眺めていた。もう身を乗り出してはいない。光が窓を照らしていた。跳ね返る光が少女を静かにした。窓のほうを指さすと妻が私の手を引きもどし私はまた行進にとりかからねばならなかった。狭い歩道ですれ違う人がたまに私に挨拶をした。私の返事はしばしば相手を戸惑わせるようだった。自分が思っている以上に声が大きすぎたり小さすぎたりしていたためかもしれない。小さすぎたと思って大きくすると大きすぎになる。大きすぎたなと思うとその逆をやる。それを繰り返す。私はいつまでも満足した返事を返せないでいる。相手の表情からしか満足は得られない。適正かどうかなど相手の中にしかもとよりない。妻はいつも無関心で私の努力には手を貸さなかった。そうこうしているうちに我が家へ到着する。庭の木を見ると緑の葉っぱがたくさんついていた。もうすぐ夏であるな。私が言うと妻はあいかわらず返事をしなかった。

　少女があんたの妻になってあげると言ったとき私にはなんの戸惑いもなかった。真っ暗で当然彼女の顔は見えなかった。私はありがたいことだと彼女のほうを向いて答えた。当たり前よ、あんたは私がいなきゃだめね。なんにもできないんだから。少女は私の手を引いて歩いた。私は左手を右側の壁に這わせた。右手は彼女に塞がれていた。彼女に案内された部屋から声が聞こえた。男が呻いていた。もしもしと私が呼びかけると男はぱっと静かになり私に対してか汚い言葉を並びたてた。落ち着いて。私にはあんたに聞きたいことがある。また少女のことかねと男が言った。妻よと彼女は言った。ああ、そうだ妻だ。あんたに答えることはなにもないよ。私は何も知らない。寝かせてくれ。うなされていたじゃないか。寝ていたんだ。男が言う。私は手で男の居場所を探った。すると顔らしきものに触れた。鼻が思った以上に高い。間違って穴に指を入れてしまったことを男に詫びなければならなかった。なに、たしたことじゃない。寝かせてくれ。と男は言った。そうはいかない、あんたには聞きたいことがあるんだ。明日じゃだめかね。明日でもいいさ。私はそうせっかちじゃないよ。しかし明日になれば忘れているだろうね。それもそれだ。しかし今日は駄目だ。明日にしてくれ。明日になればあんたはまた来るよ。そうかね。私にはわからないが。あんたにわかる必要はない。明日になればみんな忘れてるさ。

　そうこうしているうちに明日が来たとなればいいのだが。そううまい具合にはいかないさ。気長に待たないと。待ってみても来ないときは来ない。もちろん。あんたが待ってみてる間はね、そうかもしれん。何を待ってるの？彼女の言葉が無邪気とは程遠いものに感じられた。過去に培った畏敬の念は拭いきれない。私の過去はすでに私のものではないのだが。ねえ、どうなの。と少女。

　眼の前に客席があったら大笑いされているところだ。こんなに真っ暗では誰だかわかりゃしないさ。その代わりみんなが笑い物だ。あんたのせいでね、と少女。昼下がりの話でもすりゃいいだろう。暗闇に耐えきれないならな。

　昨日の真昼時、と私は始めた。なんだって、と男が大きな声を出して聞き返した。私と彼女はすでに二階に登っていた。男はなんだって、と聞き返した。

　男がなんだって、どういうことだと聞き返した。私は何も言っていなかった。いま昼下がりの話をしているんだ、ちょっと黙っててくれ。なんだって、と男が聞き返した。すまんね、ここからだとあんたの声が聞き取りにくいんだ。え、なんだって。男が聞き返した。私は何も言っていなかった。

　暗闇の中で妻の声が聞こえた。彼女が言っていたことはこんなことだった。どうせまた空欄を埋めなおさなきゃいけない。あんたの代わりに五人の人間が行ったり来たりしてまたふりだしに戻るんだよ。私の前にはいつも何かがあるようであったりないようであったりだった。暗いときも明るいときも私には何かが隠されていた。隠されていることは隠されていないことであるかもしれなかった。真夜中にカーテンを開けてもらうといつの日だったか、真っ暗だった。少しは明るくなるものと思っていた。いつもなら明るくなるのだから。少女の服さえその暗さをより少なくしてくれる光のためにそうなり得たはずであったのに。机の上に紙があるのが手触りでわかった。何の紙であるか不明である。私は何かを書かねばならないのかもしれない。私が今書いているのとは別の目的か何かのために。私に負わされている義務とは何であろうか。

　少女の吐息。私はみるみるやせ細っていく。記憶が途切れがちなのかいつもより冴えているのか定かでない夜に。

　気づけば床の上に仰向けでいた。ベッドの下に右手が入り込んで埃っぽくなっている。思いのほかベッドは高い。手を掛けられそうな場所は私からは遠い。

　誰が書いたのかと聞かれても私にはわからない。自分の話か人の話かもわからない。私が書いたものを誰かに書き換えられていたとしても当然わからない。しかしもし書き換えられていないのだとしたら読めたものではないと思うがどうだろうか。私のひっかけた文章がどんなふうに手直しされてどんなふうに読まれているかふだん私は気にかけて文章を書いているのだろうか。普段の私はどうであっただろうか。今日の私はちょっと前の私と同じようであるだろうか。変わり果てているだろうか。記録を読み返した人は私の気づかない何かにとっくに気づいているのだろうか。

　てのひらの上にてんとうむしが乗っている。私の汗を触覚で突きながらさまよいあるいている。

　輪郭のない妻がいる。だから思い浮かべよと言われてもそれは得体が知れない。いつもよりも遠くへ出かけるようだった。その日、つまり今日ああして私の背中の真ん中のあたりに手を添えて私に方向感覚を失わせていた人がどうして本当には存在しないなんて思いたくなったかわからずに真っ暗なトンネルの中まだ出口までの距離さえ推し量れない道の半ばで私は自分自身に怒りをぶつけたい気持ちを必死で抑えようとしているらしいと今では思えるものがあのときは誰に対して向けられた怒りとも動揺とも狼狽とも焦燥ともつかない何か得体の知れないものを全部妻に押し付けられたらと願ってでもいたかのようであるとはまさか私自身認めたくもない。

　今も昔もない。どうしてかなど考えてみたこともないわけがないのにそれに近いこと言いふらしているのん気なじじいと思われるかもしれない。私の部屋に若者が入ってくることはなかったと思う。だから彼が眼の前にいて私はこれほどまで何の用意もない。気のきいた言葉をかけることだってできたはずなのに。なぜか私の部屋に来る人はすぐ窓の外を見てしまう。空がいつでも、違うのだ。そうではない。彼は部屋から私を連れ出そうとする。たとえばよくわからない話をする。私の知らない場所の話をする。彼の学校の裏庭の花壇にある校舎側から見て左から三番目の植木の裏の小石の裏側に苔に隠れて見えにくい薄ぼんやりした模様の話をしてくれたりする。裏側が好きなのだろうか。

「裏側が好きなのだろうか」

「僕はもうすぐ彼女に告白することにしている。たぶんそのことにもちろん彼女だって気づいている」

「石ころのことか」

「もちろんそう。ある日、黒板消しの布がちょっとめくれていて私はなぜか嬉しかった」

「吉兆というわけではなさそうだな。だって布というのはどこか破れていないとめくれない。そのことをもちろん君も知っていた。だから君が言おうとしていることは嬉しかったということがおかしいということだ。あるいは君が言ったことは私に君が言おうとしていることは嬉しかったことがおかしいことだと私に思わせた。いや、あるいはではないな、これは」

　若者はどうして表情を変えないのだろうか。私の知らないところで彼は傷をたくさん作ってきた。

「妹がいるんだ」と彼は言ったのだと思う。そのとき私は半睡状態だった。

　私は目が覚めた。眼の前に老人がいた。老人はベッドで寝ていた。私はそれを窓側の壁にもたれかかって眺めているにちがいない。正面に部屋の扉。

　汗ばんでいる身体。

「つくつくほうし、つくつくほうし」

　トオルと名付けられたのか、その男は。彼はそれはそうだろうといった様子だった。彼には納得できないことなど何一つないかのようだった。

「いや、頷くのはもう少し遅くしたほうがいいな。もっとゆったりと。余裕をもって」

　君の妻がいつか言っていた。あんたには私しかいないと？笑わせる。もっともだ。君には彼しかいないのだろう。それとも生水かあんたは。いい加減、名を名乗れ。苗字は？

　繰り返さないぞ。私は妻に言った。植木に水をやったか。いい加減にしないと私のせいにされる。妻に怒られるのは私なのだ。妻に言ったのだ。私はそのときの妻に言ったのだ。別の妻のことを言ったのだ。いつかはそうなる。君のことだと言った。私は怒られる前に先手を打ったというわけだ。もちろんそのあと妻は怒ったさ。私が怒られると言ったこととは別の件であったが。引っこめようとしても込み上げてくるのだ、どうしようもなく。感情というやつは。

　学校の椅子の脚の間によくハンガーに使われている素材でできたワイヤーみたいなものが張られていて、そこに雑巾がかかっている。私は脚をぶらぶらさせていて、前の人の椅子にかかっている雑巾にたまたま脚が引っかかってしまい、それで前の席の人の雑巾は落ちてしまったのだ。

「君は彼がそのせいで叱られてしまうと思った」

　私は落ちた雑巾をそのまま脚で私の机の下に引きよせた。身体を右側に傾けて雑巾に手を伸ばした。

「後ろの席の人に見られているとも気づかずにね」

　彼は私の友だちではなかった。少なくとも彼は私のことを友だちだとは思っていなかっただろうし、私も彼のことはなんとも思っていないと彼には思われているだろうと思っていた。つまり僕は彼のことが友だちかどうとか言う立場になかった。彼のつむじは時計回りだった。理科の勉強では高気圧の模式図を覚えるときに彼のつむじを思い浮かべることにした。高気圧では空気は時計回りに吹き出てくるということを覚えるのに彼の頭が役に立ったというわけだった。彼とはそれっきりの関係だと言いたいわけではない。変な勘繰りはよしてもらいたい。

「彼が何色の服を着ていたか当然君にはわからない」

　彼が授業中にいつも鼻くそをほっていることなど誰も気にも留めていないようなのが先生には不思議でならないようだった。当時の私にしてみても先生のほうが滑稽に見えたくらいだったからそのころの私たちには鼻くそを掘ることには何のためらいもなかったし、何がそれに二の足を踏ませるのか考えたことすらなかったはずだった。

　もう一度同じ話を私はしなければならない。というのは、私は間違えたのだから。

　学校の椅子の脚の間には針がねみたいなものが掛けられていてそこに雑巾が掛けられていた。私は机に鉛筆で絵を書いていた。脚はぶらぶらさせていた。すると前の席の人が私のほうを振り返って喋った。私もだから喋った。私の脚が彼の机の脚にあたっていることに私は気づいていなかった。それを気づかせてくれたのは彼だった。雑巾を落とそうとしても無駄だと彼は言った。私はおそらくその日彼の雑巾を床に落としてしまう夢を見た。実際雑巾は上から洗濯バサミでとめられていたから落ちるはずがなかったのかもしれない。かもしれないというのは実際洗濯バサミでとめられていたかどうかということがどうも私には自信がない。洗濯バサミの存在は嘘ではない。しかしすべての学年すべてのクラスで私たちがそれを使用していたかどうかまでは確かなことが言えない。私が彼にお咎めを受けたそのときに私たちのクラスで洗濯バサミを使うことが習慣化されていたかどうかが思い出せない。

　年をとってからの笑い話にするにはもっと出来すぎた話であったほうがよかったと彼は思っているかもしれない。バーなんてそう何度も来るところじゃない。彼がほんとうに当時の彼かもわからない。当時の彼であるはずはないのだが。彼はよくトイレに駆け込んだ。今でもそうだった。ということは彼なのかもしれない。遠くない親戚ということもあるかもしれない。だって彼は顔が全然彼らしくなかった。何かが変わってしまったというようでもない。何が変わったかなんて私にわかるはずもない。つむじを見ればわかるかもしれない。浅はかな考えだった。私は彼のつむじにしてみてもよく見たことがなかった。よく見ているつもりでいたのは私の想像で補われたつむじらしい形のものでしかなかったのかもしれない。私の頭に思い浮かぶつむじは彼のものではなかったというわけか。トイレから帰って来た彼のつむじをトイレに行くふりをして後ろから覗いたとき私はまったくなんてばかげたことを考えていたんだと自分自身の浅はかさはまるで底が知れない。とっくに禿げあがった彼をどうして私は彼ではないかと少しでも疑っていたのか。もちろん今でも疑っている。彼を彼らしく見せているものはそれではいったいなんだったのか。いっちょまえなジャケットで覆われた丸まった背なかにひょっこりつむじのない頭に耳がついていて、手元でグラスを揺らしていた。特にこだわりのなさそうなバーテンダーがカウンターの端の壁にかかったテレビを眺めてグラスを磨いていた。

　いつみても殺風景だ君の部屋は。天井には大きなポスターが一面に張られているといっても、一緒にぶら下がっている直方体の格子に和紙の張られたようなものに囲われた形の電気に邪魔されてそれは平滑というわけにはいかない。ポスターには何が描かれているか君は教えてくれない。見ればわかるじゃないかと君は言う。確かに絵であればそれがなんであるかわからなくとも少なくとも何が描かれているかぐらい口で説明できなければならないということは教育的であるかもしれないと皮肉たっぷりに答えたつもりでいたのが恥ずかしいと思える日がくるなんて思いもよらなかったと白状する日がくるなんてと言いかけたのは僕ではなく彼だった。いつもベッドで眠っている顔をして、天井を眺めていたんだから。たとえば、青い線が何本かあるいは何本も走っているとか、水たまりのようなシミがいくつもあるいはわずかに線を遮っているとか、緑の塊は草木や自然の一部であるかもしれないとか君には言える。僕たちは天井を舐めるように眺めたことは一度もない。なめずりたくなるような文章に出会ったこともない。誰かが窓を開けた。内側から。窓ガラスから透けていた光が雪崩れ込んできた。僕はベッドの横に布団を敷いていた。ベッドのへりによさりかかって掛け布団の上に腰掛けていた。ベッドの上に寝ていた彼は布団を敷きにくくしている部屋の真ん中に置かれた丸いちゃぶ台を挟んで反対側でくすぶっている君のことを咎めていると思った。だから私は君の話を聞いた。なんの変哲もない部屋だ、殺風景というのは僕にも彼にもそのほか大勢の同年代の人たちにもあてはまることだった。

　学校の話をするのはこれで二度目だ。私が書き落していなければ君の話が出てくるのはこれで二度目ということだ。お愛想程度に眼をパチクリさせて先生をかえって怒らせてしまったことがあった。私は廊下のざらざらした緑の上に倒れた。私には何十年も昔の話のように思われる。それがつい先日のことだと言う。それを言ったのがいつのことだかすでに思い出せないでいる。

　蛍光灯の明かりがあれば。学校ではいつも背中を叩き合う生徒たちの声が。君の背中を叩いたっけ。そうして懐を広くしておいて、空気の流れをしつらえる。いつものように。振り返れば生徒。生徒。無口な一人が君のほうを見ていた。私はそれを見ていた。どこか空々しいが、君は楽しそうに口ずさんだ。掲示板に張られた紙を撫でる。手が紙の裏のゴムのような感触になじんだ。紙に書かれた文字を意味もわからず、というのはたぶんそれは読めない代物であったから、呟く。見てくれだけでよかった。私はこう言った。

「花咲く、ということはこれからも疑いなく、忘れられる。情緒といわれる塊が懐かしんでいるところ、鉄格子に囲まれた君の家であったところだ。いまはないソファがある。彼が言ったことは正しかった。君はいつか舞台に立つと。心許なく」

　私は過ぎ去ったことの到来を待つまでもないことを知りながら理解できずに焦慮にかられていたということにした。といっても私は超能力者というわけではないのだから、話はすでにどこかでねじれているということになるかもしれない。君がくすぶっていたのはもっと昔のことだった。先日会ってあらゆることが次々起こってしまい順序立てて話してあげることができないのが私にはもどかしい。バーで会ったのだってもう遠い昔のことであるかもしれないのに。いま私が頼りにしているのは砂漠に埋もれた似たり寄ったりの無数の粒で、選りわけるには私の能力が追いつかない。気まぐれと思わないでほしい。

　私がついた嘘はほんの少しだけだ。思い出したときにでも、いつか訂正しよう。

　教室のいちばん前に座っていた私は単にいくじがなかった。教室と教師の板挟みというわけだ。いちばん前というのは単にその中間に位置していただけだった。流れに身を任せれば前に座らざるを得ない。私が驚いたのは

　いつ書かれたものか知らないが、私という人がいったい何に驚いたというのか私には見当もつかない。知らぬふりをして書き続けることもできた。書き続けられてきたことは多々あったことであろう。そして中断されてきたことも多々あっただろう。私はどちらかというとひと言物申してからではないと書き継げないたちであるのだろう。もちろん見当もつかないからといってそれが私が書いたものではないとか言っているわけではないことはこれをここまで読み続けてきた人にとってはいちいち説明するようなことではないのかもしれない。私は何もかも忘れてしまった。私はいったい何を書いているのだろう。私がいまどこにいるのか君は知っているかもしれない。もちろんこれを読み返せば私にもわかるかもしれない。といっても手元には原稿が数枚あるばかりで、どこから何が始まるようでもないし、誰のことについて書かれているのかさえ私にはわからない。とにかくここにはベッドがある。私は窓から海辺の景色を眺めることができる。誰もいない。海は寒々しい。砂浜が暗い。

　何の目的もなくと言ったがそれは正しくない。いましがた彼の言った言葉は要するに私は彼に何事か口ごたえをしたということなのか、彼の頭がおかしいのか。

「台風はビニールハウスを骨組みからねじまげてしまった。最初は枕元で何かが地面を転げてる音がした。二階に上がって窓を覗くとビニールハウスの外側のビニールの片側がはがれてパタパタはためいていた。その音だった。それが前日の話。街角では折れた電柱の話や根こそぎやられた大樹の話で盛り上がっていた。瓦がはがれてしまったといって眼を丸くしていると相手も眼を丸くしたりするし、楽しそうにしたりもするし、頭をかかえる人もいる。信号機がいうことをきかない。私は止まればいいのか渡ればいいのかわからない。君はきっと昨夜の台風で頭をやられてしまったのさ」

　彼は私を台風被害のうちの一つに数え入れて私を安心させようとしたのだ。そういう優しいやつだというのは私は彼の眼を見ればわかった。言葉というのは難しい。うつらうつらと書いている。私を人間に数え入れてほしい。私は全く何も考えていないのだ。言葉とは裏腹のことさえ。裏腹どころか私は、ただうつらうつらとしているだけなのだから。

　妻のエプロンの紐。私は赤ちゃんと言われても気にしたことなどさほどなかった。なかったという私には記憶があるに違いない。私には記憶がある。だからなかったなどと言うことができる。そう思われるだろう。私はなかったということでまさか記憶を取り戻そうとしているわけではあるまい。未来から記憶をたぐりよせるのだ。そのぐらいわけないことだろうと。誰かれ構わず記憶の糸を手渡してしまうことは私だって躊躇する。どれが私の記憶であるかはまさに誰のでもない未来からやってくる。私は私の妻のエプロンを未来からたぐりよせた。まさに私は未来では赤ちゃんであった。未来という言葉は未だ来ないと書く。未だ来ないという意味では妻のエプロンはもう未来ではない。私はそれをたぐりよせてしまった。ということは未来は言葉にならない。こんなことはもうさんざん書いたはずだ。私が書いたかもしれないし、書いたのは私ではないかもしれないが、きっと私がたぐりよせたということはもう何度も書いた。たとえ妻が死んでいたとしても。

　海が近い。私のずぼんにはポケットがついていなくて、手を突っ込んで隠すことができない。空が高くて、日射しは粒子の量がまばらだ。粒子というのは光ではない。私はただ粒子と言った。雨が少し降っている。私は杖を少し湿った砂にめりこませる。杖に体重を乗せてみぞおちを押すようにもたれかかった。私は生きているのだろうか。タイプライターというものはもう壊れてしまった。それではこれは誰が書いているのか。

　あれからどれだけ経ったのか。一日しか経っていないということもある。私が一日経ったといってもほんとうは一年と一日であるのかもしれない。私の記憶のあいまいさにつけ込む人がいたとしても私はさほど気にするわけではない。別に面白いことではない。

　蝉の声が聞こえない。確かな証拠として今は夏ではない。どうりで寒々しいわけだった。星の位置や太陽の位置を見て季節が分かるという人もたくさんいるという事実を思うと私は戸惑わずにはいられない。私は季節をそこまで知りたいと思ったことはなかった。季節を知らないと言えば落胆されることは知っている。日付でさえもちゃんと知らなければ一点は引かれてしまうのだろう。名前でさえもそうだ。私がもっともどうでもいいと思っているものほど配点が高い。私の名前は誰かが知っているだろう。確からしいことはなにもない。こうして無様にみぞおちを痛めている私だ。いまや痛みしか感じないそれを元に戻すこともできない。いまや、と言えば今のことでもあるかのようだ。遠い昔の痛みが込み上げてきたということでもあるのだ。ほんとうは肉が削げ落ちてからは心の痛みとやらは想像することもできない私だ。今日は誰も私を訪ねてはこないだろう。もし来たら覚えているうちにすぐに書き留めねばならない。私には務めというものがない。それが苦痛でもない。まったく何かが抜け落ちている。家があって海や空もあるが私以外誰もいない。どんな生き物であっても見掛けでもしたら大喜びなのに。私の眼には生命の姿が映らなくなってしまったのか。海や空が見えるというのにそんな中途半端なこともないだろうが。こんなことを書くと私が寂しいみたいだ。

　四千七百六十五年十八月七日。日付を定めることにした。次に眼が覚めた日を翌日とする。

　学校に行ったか？いつものことながら。私は転寝をしていると居心地悪くなり、次第にベッドの脚側のほうへ潜り込んでいったとみえる。身体がいうことをきかず掛け布団にうずもれたままひょっこり顔を覗かせてやることもできない。学校へ行ったかなど私が聞かれるはずもないだろうに、窓の外からの声に答えたいいっしんで首をのばしてみるが徒労に終わる。私が叫ぶと扉を叩く音がした。それも強く。非難がましい音が始まってしまった。本来なら窓を上げてぱっと外へ飛び出して子供たちを追いかけまわしているのが正しい。私としても子供たちとしてもこの状況は理解しがたいことで、いつもなら今頃はずぼんのふちをひっつかまれてお尻丸出しにされているはずなのにどうしたことだろうと思っていた矢先であったに違いないが、そのとき大きな音がしたのだ。がしゃんと窓が割れる音。私の家の窓ではない。音の聞こえてきた方角からするとそこには私が知るところでは家などないはずであった。方向感覚が狂ったのだろうか。なにより私がここに住もうと思った理由はよその家のどたばた騒ぎに巻き込まれずにすむと踏んだからであったのに、まず子供たちが私の期待を裏切りなにより掛け替えのない喜びを提供してくれたのには感謝したいくらいで、ありがとうの気持ちを込めていつも私はちびっこのずぼんとぱんつをひっぺがしてやるのだ。